

国文学研究資料館報

第6号

昭和51年3月20日

古典本文の伝流

橋本 不美男

一、

「拾遺和歌集」(二〇卷)が第三代の勅撰和歌集であることは、現在では何の疑いもなく認識されていることであろう。しかしながら、この「集」ときわめて密接な関係をもつ——「集」にその全歌が含まれている「拾遺抄」(二〇卷)の存在がからんで、平安後期から、極端ないい方をすればつい最近まで、(1)どちらが第三代の勅撰集であるのか。(2)「集」と「抄」の撰者は誰か。(3)「集」と「抄」の成立の前後はどうか。の三点について論ぜられつつづけてきた。

(1)の問題については、源俊頼の「俊頼髓腦」等の院政期の歌学書が、例歌として古今集等とともに拾遺抄と明記して主として「抄」からとつて

いること。また古今集、後撰集等の伝本とくらべて、平安朝期書写の「集」には藤原定家の貞応元年(一二三二)成立「三代集之間事」にも述べられているように、第四代の「後拾遺和歌集」の名目が、歌学書中だけではなく、現存伝本にも「後拾遺和歌集」とするものがきわめておおいこと。また第五代「金葉和歌集」・第六代「詞花和歌集」とともに、「抄」とおなじく一〇巻立である等の傍証も加えて、平安末期頃までは、「拾遺抄」が勅撰第三代の集であると、一般にうけとめられていたと推定できる。しかしながらこの享受も「三代集之間事」によって、一般的に「抄」を三代集の一つとしているが、「集」が

正しい第三代の勅撰集であることが強調され、以後は定家の歌道における権威により、近代の一、二の説を除きこれを疑うことはなかった。

(2)の撰者も、定家「三代集之間事」にはじまる「集」は花山院「抄」は公任説を主流として、その逆、「集」「抄」ともに花山院、またはともに公任(新潮社版日本文学大辞典)、さらに「集」の撰者に長能・道濟を比定するなど、清輔・顕昭以来諸説が提示されている。

(3)が最も重要視された論点であり、末期から「抄」は「集」の抄出とする説が圧倒的であった。これも「三代集之間事」で、俊成以来の家説として、公任が自歌の、

あさまだきあらしの山のさむければ散る紅葉ばをきぬ人ぞなきを、花山院親撰の「集」で下句を「もみちの錦きぬ人ぞなき」と改められたのに憤慨し、自ら一〇巻に抄出したことを基本とする二、三の理由を

はじめ述べて抄出説を補足したので、以後この説が祖述され日本文学大辞典におよんでいる。一方、「集」は「抄」を増補したとする説は、近世末期になってはじめて出されたものである。すなわち堀保己一が、「群書類従」に拾遺抄を所収するに際し、本文末尾に奥書をつけ、その中で「集」「抄」所載の作者等の官位表記を考証し、「抄」が先行作品であることを記述したことにほじまる。堀保己一説は、藤岡作太郎博士等により補訂が加えられたが、「抄」の母胎となった「如意宝集」断簡および同目録の発見によって更に強く裏付けられ、堀部正二・三好英二両氏および久曾神昇博士により、如意宝集「抄」↓「集」の編集経緯が明らかにされ、今日の定説となっているわけである。

以上にわたって、「抄」・「集」をめぐっての平安後期以来の論点を簡単に紹介してみた。これらを通して、強く印象づけられるのは、「三代集之間事」の存在であり、その後世への

目次

| | |
|----------------------------|------------------------|
| 古典本文の伝流……………橋本不美男……………1 | 評議員会議の開催……………12 |
| 欧米かけある記……………福田 秀一……………5 | 人事異動……………12 |
| 開館を控えて……………本田 康雄……………8 | 受贈図書……………13 |
| 文献資料部業務報告……………大久保 正……………9 | 大学内学会および研究会一覧……………14 |
| 研究情報部業務報告……………古川 清彦……………10 | 昭和五十一年度春季学会開催一覧……………16 |

強い影響力であろう。まず転落して
いた「集」を勅撰の座にすえ戻した事
が第一であり、自作を改作された作
者の心情という強い共感を呼ぶ理由
を付けて、花山院の「集」から公任の
「抄」抄出説を補強し、近代に至るま
で影響を与えていることである。

二、

前述したように、「拾遺抄」は平安
末期にいたるまで、三代集の一とし
て享受されてきた。定家はその理由
として、まず撰者四条大納言公任の
文芸世界における独歩の位置を指摘
している。その公任が花山院親撰の
「拾遺集」を見て不本意に思い、「意に
任せて是を取捨」して「抄」とした。そ
の結果は、「三代集之間事」によると、
天下好士、靡然而信仰、門々戸
々、称三代集、書写握翫之人、
偏以十卷之抄用之、

と記している。これによると、定家
時点でも「抄」の伝存本はおおく、
これが現在、古筆切として伝存して
いるのであろう。この平安後期まで
における「抄」の享受は、「抄」その
ものの撰集としての優秀さであろう
が、その撰者が公任であることと、
平安末期までにおよぶ文芸界におけ
る「無双の人」という公任信仰がも

たらした結果といえよう。

一方、「集」の享受については、「三
代集之間事」にひきつづいて次のよ
うに記されている。

更不見本集、因滋此集、遺伝世
已希、漸如魯壁之古文、殊集和
歌之文書人、博覽之余僅書之、
猶不加三代集、

これによると、定家時点では、「集」
の伝存本は極めて少なかったことが
わかる。しかしながら、全く流布し
ていなかったわけではなく、この「三
代集之間事」によれば、「抄」成立流
布の当時においても、藤原行成が併
行して「集」を多く書写したと記して
いるし、片桐洋一氏によれば、「能因
歌枕」・「奥儀抄」(清輔)・「袖中抄」
(顕昭)、「五代集歌枕」等には「集」の
歌が引用され、その本文は現存定家
本の系統ではないという。

では、「抄」と「集」の現存伝本の情
況はどうであるかという点、これは
全く定家時点の逆現象であるといえ
よう。「抄」の現存伝本は、完本とし
ては静嘉堂文庫蔵貞和三年(二三四七)
書写本を最古写本として、他は江戸
期書写の五本が知られているだけで
ある。また古筆の存在は、伝公任筆
唐紙拾遺抄切以下相当数の平安朝期
写の古筆切が伝存して居るが、鎌倉

期写は残欠本一部があるにすぎない。
また貞和本が、二条家と対立する六
条家の証本を写している事を含めて
考えると、鎌倉期以降においては、
「抄」の享受流布は定家のいう「殊
集和歌之文書人」に限られていたも
のと推定できよう。

これに対して「集」の現存伝本は、
片桐氏の御研究によれば、氏が披見
された範囲でも一〇〇本以上にのぼ
るといふ。しかも、この多数の「集」
現存本の、ほとんどすべてが、藤原
定家が七二歳の天福元年(一一三三)
に書写校訂した、いわゆる天福本の
系統であるといわれる。また定家本
系以外の「集」としては、かつては宮
内庁書陵部蔵の堀河具世筆八代集本
のみが異本として知られていた。し
かしながら、この十数年にわたる片
桐氏等の博搜により、「抄」から「集」
に成長する過程の異本として、天理
図書館本以下残欠本・合成本を含め
て六本が発見報告されたが、具世筆
本を合せても七本であり、しかも「集」
として完成する前の過程の本文であ
る。したがって、「集」として完成さ
れた形態の本文で伝存しているのは、
定家本に限られるという現象を示し
ている。

三、

また定家は、現存伝本および諸記
録によると、四八歳の承元三年(一
二〇九)から七六歳の嘉禎三年(一
二二七)の間に、古今集を一四度に
わたって校訂書写している。伊達家
本等の年次不記載のいわゆる無年号
本の存在を考えると、定家は生涯に
二〇回近く古今集を書写校訂したと
推定できよう。後撰集の場合も、年
号本では承久三年(一一二二)本か
ら嘉禎二年(一一三三)本にいたる七
類が現存し、これに定家校訂初期と
推定される無年号本二類を加えれば、
後撰集も生涯を通じて一〇回以上の
書写校訂と推定できる。

この定家の、古今・後撰両集の書
写校訂と比較して、三代集としての
拾遺集の書写校訂は少ない。天福本
のほかは、伝本の奥書にみられる(1)
貞応元年(一一二二)七月八日書写、
(2)貞応二年九月十一日書写であり、
明月記による(3)寛喜三年(一一三二)
九月十二日の書写である。このうち、
天福本と対校されているが、定家
校訂当時の本文を残しているのは、
(2)貞応二年書写校訂本の鎌倉末期写
京大中院本と、その転写本である寛
永二十年写高松宮本だけであると片
桐氏はいわれている。この書写校訂

のうち、年次の最も早い(1)貞応元年時点の定家奥書を、国会図書館永正十五年書写本によって示すと、つきのとおりである。

貞応元年七月八日申一点、重以家本終書写之功、為後学証本也、

戸部尚書在判

すなわち、それ以前にも書写したが、ともに底本は俊成以来の「家本」であったことがわかる。(2)貞応二年書写本の定家奥書を見ると、底本はやはり「以家本重書写之」であり、

此集、世之所伝、無指証本、多以狼藉、仍以数多之旧本、彼是取其要、猶非無不審、

と記し、また「抄」と算合した結果を注している。(4)の現存「集」伝本の大部分を占める天福本の奥書も、相伝奥書を除けばほぼ同趣旨であり、底本は家本(愚本)であり、「此集」以下の校訂注記も(2)と同文である。

しかしながら(2)貞応二年本と(4)天福元年本の本文とを比較してみると、(2)本の方が重出歌が多く、勅物が少なく、また本文に「少々相違」があるという。この相違は定家の校訂のある意味での進歩を示しているものでもあり、また定家の指摘しているように、「集」の証本がないため、限られている旧本を段階的に探し出して

は校合し、その都度取捨するという、定家の研究本文である性格を端的に示しているものと思われる。また、この貞応元、二年には、定家は古今集を五度、後撰集を三度書写していることが知られる。この期前後の定家の三代集書写状況からみると、定家は六一歳の貞享元年頃より三代集の校訂に集中しはじめ、以後晩年に至るまでつづけていたことがわかる。このことは、老齢に至って、三代集を中心とする相伝の家本の確定を意識した現象と思われるし、この時期に、ほぼはじめて拾遺集の書写校訂をしていることは、古今・後撰の両集に比して、当時の拾遺集伝本の少なさを示しているよう。

四、

以上のように、勅撰三代集の一である「拾遺集」本文の伝存流布状態を歴史的に見てみると、古典本文の伝流は、ある時代の文化史的背景によって、大きく左右されていることがわかる。すなわち、拾遺抄・拾遺集を成立させる基盤となった一〇世紀末から一一世紀はじめにかけての文化圏において、公任は「諸道之名譽」の人であり、「時輩之掃伏」する位置にあった。また、この時代の文化

遺産を享受した後代においても、定家は「独歩之心、無双之人歟」と評しているし、順徳院(八雲御抄)も「天下無双」の人と位置づけられている。この「抄」成立当時から鎌倉初期にまでおよぶ、「抄」の撰者公任に対する強い尊敬が、「抄」の内容が「集」より優れていることと併せて、「集」を湮滅に近い状態とし、「抄」を広く流布させ勅撰三代とまで認識させることになったと推定できる。一方、「拾遺集」は定家「三代集之間事」によって、第三代の勅撰集として強調された。またその内容評価についても、

微臣幼少之昔、初提携古集古歌之日、披見此集、忽抽感懐、愚意独慕之、

と、またつづいて父俊成の眼をばかりながらも、「集」を熟読したことを記している。この定家の「集」に対する傾倒は、後代に強い影響を与えたものと思われる。徹書記物語に、

そもく歌道において、定家をなみせんともがらは、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり、

とまで尊崇されている後代の定家観は、恐らく定家晩年から醸したされ、時の経過とともに強く後代の文芸界

を覆っていったものと考えられる。従って、この定家の「集」に対する評価は、ほぼ絶対的なものとして後代にうけとめられ、平安末期までにある程広通した「抄」の享受は特殊なものとなり、「集」があまり流布することになったのであろう。

鎌倉時代には定家も記すように、「集」の古本は少なかった。従って前述したように、古今・後撰両集と比して、定家の拾遺集書写校訂の度数は少ない。この状況では、後代「集」を享受する場合は、定家が校訂し相伝の家本しようとした天福元年書写本にしようとするのは自然の流れであろう。このようにして、かつて定家は、「集」証本の伝存しない根源の理由を、公任の存在にもとめたが、定家以降は定家の巨像によって、「抄」と「集」の伝本は定家時点と全く逆の現象となったわけである。しかも定家校訂本の権威は、数少ない定家以前の古本文をも全く湮滅させたことにもなるわけであろう。

五、

三代集のうち、現存伝本の最も多い「古今集」の場合は、平安時代の流布本と思われる元永三年(一一二〇)書写本、六条家の証本である清輔本、

また定家本のもとになった俊成本等が完本として、また高野切以下各種の平安時代の古筆切が、非定家本として伝存している。しかしながら、やはり定家本が現存伝本の大部分をしめていることも事実である。しかも定家の書写年次別に一〇類も現存している定家本のうち、その大部分を占める伝本は二条家相伝本である(1)貞応二年七月二十二日書写本系と、冷泉家相伝本である(2)嘉祿二年四月九日書写本の系統である。後撰集の場合も、堀河具世筆本等の非定家本も数本あるが、現存伝本ほとんどを定家本で占めており、しかもその大部分が、奥書によると二条・冷泉両家にも相伝されたことになる天福二年三月二日の定家書写校訂本に属している。

諸伝本の奥書によると定家の同一年次書写校訂本である。この現象は実際はあり得ない事である。拾遺集現存伝本の大部分を占める天福元年本は、奥書によると二つに類別される。すなわち、

天福元年仲秋中旬、以七旬有余之盲目、重以愚本書之、八ヶ日

終功

翌日令誦合訖

此本附属大夫為相 類齡六十八桑門融覚(花押) c

とあるのが、為家から為相に相伝した冷泉家本系の奥書である。これに對して、冷泉家本 b の上に、d「為授鍾愛之孫姫也」の記文があり、c 奥書を欠くのが二条家相伝本系の伝本である。

冷泉家相伝の定家筆本は上冷泉家に現存しているが実見はできない。しかしこの定家筆本を忠実に臨写した中院通茂筆本等があり、それによると、定家筆の d 記文を削りとして、それに重ね合わせて為家筆の c 記文が書かれていることがわかる。すなわち、この天福元年本はもと二条家相伝本であったのが、為家により相伝記文を書き直されて、冷泉家相伝本となったわけである。従って、同じ後撰集の天福二年三月二日定家書写本系で、二条・冷泉それぞれの相伝記文をもつ現象も、冷泉家蔵の定家筆本を実見すれば、あるいはこの拾遺集伝本と同じケースであるかも知れない。

このようにして「拾遺集」の二条家相伝本は、為家六八歳の文永二年(一二六五)に冷泉為相に相伝されたが、現存伝本で二条家相伝記文を持つ天福元年本は多い。そのうち、祖本が文永二年以前に定家筆本から転写したことが確実である二条為明筆本・東常緑筆本等は、ほぼ正しい定家筆本の本文を伝えている。しかしながら、それ以後に派生したと思われる二条家相伝本も多く、為家の孫定為法印筆と伝えられる静嘉堂文庫本また尊経閣蔵浄弁筆本をはじめ、室町・江戸期を通じての転写本は多い。これらのうち、鎌倉末・南北朝期の書写本である伝定為筆本・浄弁筆本をとってみても、冷泉家相伝定家筆本系と比べると、本文の乱れが甚しいと片桐氏は指摘しておられる。

この現存二条家相伝本系拾遺集の本文の実態は、血脈断絶以前の二条家においても、拾遺集の確実な証本がなかったことを示しているよう。従って家相伝の天福本としながらも、本文が不安定であったので、他の定家本と校訂するなどの操作が行われ、現在残された様々な本文の乱れとなったものと思われる。従って、同一作品である古典本文が、例えば同じ御子左流である二条・冷泉あるいは飛鳥井家、また六条家(後の九条)等の別により、異った形態の本文に校訂書写され、それがおのおのの家学の証本として、門流別に尊重され伝流するのが、普通の現象であったと考えられる。

六、

一一世紀初頭に勅撰第三代の集として成立し、現在一〇〇本以上の諸伝本を残している「拾遺集」も、本文的にみても、極端に言えば、天福元年定家書写校訂本のみを孤本であることがわかる。その本文の相違は、同じ御子左流でありながら、証本を失った二条家門流による自流の証本作りの結果といえよう。

このことは、古典本文の伝流に、前述した公任・定家が及ぼした、ある時代の特定個人に対するほぼ絶対的な尊崇・信頼のほかに、門流による証本形態としての伝承が、大きな影響を与えていることがわかる。中世以降の家学は、単なる家元的存在ではない。貴族の公的生活の中にあ

って、家職として、公的には宗匠家として貴族を教導する任にあるわけである。従って、そのもとになる家の証本は、あくまでも權威のあるものでなければならぬ。その權威とは、家の証本がその古典作品の唯一の正統本文であることであり、それに対する何等かの裏づけによって保たれるものであろう。

三代集の御子左流の証本は、俊成本をもととしての定家校訂本であった。これに対して六条家は、古今・後撰両集もこれと異なる清輔本を証本としたものと推定される。現在発見されていないが、拾遺集の六条家証本は奥儀抄・袖中抄等の引用本文からみて、定家本と異なる本文であらう。このことは、天福元年本に算合された定家所特の「抄」が、歌序・歌数からみて、現存する六条家系の貞和本「抄」と異なる点からも推定できよう。また、十四人・十五人・十六人本と、明らかに形態の異なる「堀河百首」の伝流をみてみると、伝本の奥書と六条家系歌学書の引用からみて、六条家の証本は初期の俊頼私稿本の十四人本であり、御子左流は、最も流布していたと思われる最終形態の十六人本であったらしいことが、御子左流撰者による勅撰入集歌によって知

られる。これらにより、六条家は、秘本的な特殊な本文を持つものを家証本として伝承させ、御子左家の場合は、定家の書写校訂本が証本であるが、その三代集校訂にみられるように、俊成以来の家本をもととして、当時流布していた諸本とたびたび校訂して、段階的に確定したものであることがわかる。

六条家が南北朝中期に断絶し、以後は御子左の二流が文芸界を独占する。従って古典作品の本文は、定家の校訂書写本が絶対的な証本として位置づけられる。しかしながら、六条家につづいて御子左正流の二条家の血脈も絶える。この二条家相伝の証本類がどのようになつたかはわからないが、定家以来の正流としての二条派道統は頼阿以下に伝えられ、古今伝受を軸として室町中期には三条西家学に継承され、江戸期に至るまでその門流は継承され、御子左正流の意識は強かった。しかしながら室町期以降における家職としての宗匠家は、冷泉家であり飛鳥井家であった。この、同じ定家を根源とする門流ではあるが、対立し屈折する道統の継承が、各家証本を軸として、古典作品本文の伝流に対して、微妙な影響を及ぼさないわけではないもの

と考えられる。

(国文学研究資料館国文学文献資料調査官)

料収集計画委員、宮内庁書陵部図書調査官)

欧米かけある記

福田 秀一

昨年十月末から年末まで、「在外国文学資料調査」というテーマで、文部省在外研究員(短期)として、二ヶ月の海外出張をした。

無論初めての海外旅行、殊に下宿経験のない私にとっては、二ヶ月も家族と離れて暮らすことの方が大問題であった(これまでのそれに匹敵する唯一の体験は、終戦の年の三月の学童疎開)。

けれども、いざ旅に出てみると、案ずるよりは何とやら、どうやら何とか行つた。無論、各地でお世話下さつた方々の御手配や御親切のお蔭はあるが、一人旅の気楽さ、失敗も楽しみのうちである。そして皆が心配することば「の」方も、現地で見ている中に、われながら目に見えて上達する(?)ものである。殊にヨーロッパの各地(東欧は別)では、洋風民宿とも言うべき安ホテルかペンション(下宿)をとり、主人もしく

は主婦ハタチヨメと親しくなつて、多年一度は経験したいと思つていた下宿気分らしきものも味わうことができ、まことに愉快であった。

ところで私の今回の出張のテーマは、前述の通り「在外国文学資料調査」(ザイガイでちよつと切つて訓む)であったが、何分初めてのこと故、一箇所ずつじっくり調べるといふよりも、各地にどのような国文学資料があるのか、私なりにできるだけ広く見ておきたい、また狭義の資料ばかりでなく、各地の日本文学研究の実情をもなるべく多く見えてきて、今後の自他の調査研究に少しでも役立てることこそ、今回の出張の意味であると考え、そこに性来の欲ばりや好奇心も加わつて、できるだけ多くの国・箇所を見て回るプランを立てた。その結果、主な訪問先だけでも七ヶ国、通過したりちよつと立ち寄つたりした国を入ると十余ヶ国という

慌だしい旅になった。けれども、当館のみならず一般にもあまり知られていない東欧諸国の事情なども知ることができ、大いに有益であった。

そうした知見は、各地で案内・応対して下さった方々の御親切に応え、特に今後訪れる人が私と全く同じことを訊いたりして手数をかけぬためにも、いずれどこかに詳しく報告したいと思うが、今回は取敢えずその中からいくつかの要点を記しておく。

アメリカで最初に訪れたのは、友人 Plutschow 助教授のいるカリフォルニア大学ロサンゼルス分校 (UCLA) であった。ここは日本研究のいわゆる名門ではないが、日本学を学ぶ学生の数も多く、必要な基本図書や雑誌類もよく揃っていて(但し和書類は殆んどない)、ある意味でアメリカの日本研究の平均・標準を示しているように思われた。

次に訪れたカリフォルニア大学バークレイ分校 (UCB) では、学部長の McCullough 教授(夫君)の案内で Durrant Hall 内 (Dept. of East Asian Studies Library) を調査したが、状況は UCLA と同様であった (UCB のことは、三・四号の古川・松田両教授の報告にも述べられている)。東部へ移る途中立寄ったミシガン

大学の Brewer 教授(チェアマン)のところでは、「長編百首」(江戸写、先年売立て一見)、「竹取物語」(奈良絵本の絵の面切除)などを一見できたほか、熱心で優秀な大学院の諸君と会食(日本語で)の機会を得た。

コロンビア大学では、あいにく休暇中で Morris 教授には会えなかったが、お茶の水女子大で互に見かけていた Miss Sparling (助教授) をホテルの電話帳で見つけ出して案内を頼むことができ、Kent Hall の East Asian Library に Yampolsky 教授を訪ねたが、(二)も古川・松田両教授の文に詳しいので省略する。

むしろ有益だったのは、ワシントンの議会図書館(LC)を訪ねたことであった。ここでは日本部の部長、黒田良信(アンドリュー)氏と次長キー小林氏とが応対して下さったが、東洋部門は本館と道路を距てた新築の別館に移され、古書に関しては未整理で仮配架の状態であった(去年松田教授が実見できなかったのは、この移転のためか)。その古書は約三五〇〇点を数え、近く目録化に乗り出すというが、旧蔵もしくは購入者の名を冠したいくつかのコレクションから成り、特に坂西志保氏が一九三〇―四〇年頃精力的

に購入したもので文学書(殆んど板本が多く、「古今和歌集契沖版下本」などもあった)。

ボストン美術館(MFA)やハーバードの Folk Museum のことは松田教授の文の他、反町茂雄氏「日本の古書の在外秘宝」(文車の会編「ヨーロッパ古書紀行」所収)の一文は、米・英・仏の各地について有益にも詳しいが、前者では梅尾博士のお世話で、もっぱら書蹟を調査した。有名な絵巻を含む絵画類は季節の関係などで閲覧できなかったからであるが、書蹟としても岡倉天心が購入した「後京極歌切」(但しこれのみ実物不見)から近年購入の「住吉切」(鴻池家旧蔵)に至る十数点がある。

ハーバード大学では主任の Hibbett 教授に挨拶し、坂坂氏の御案内・御紹介で学内のいくつかの図書館・美術館を一巡した後、Yenchin Library を一見(周知の通り研究情報の宝庫)Fogg Museum に通って Mrs. Cranston (夫君は日本文学科教授)のお世話で Hotel (目録既刊)Hyde Park コレクションの逸品を手にした。前者では「平家物語絵」(詞・文字なし)など、後者(ハイド)では先年売立で見た「春日本万葉集切」(紙背春日懐紙)、「源氏物語伝説」(巻物)、「方丈記

〔伝説巻〕や「古今和歌集〔伝説巻〕」その他多くが目目され、ぜひ改めてゆつくり調査したいと思った。

イギリスでは、ロンドン大学東洋アフリカ学部(SOAS)やケンブリッジ大学図書館(UCLC)・オックスフォード大学ボールドレイ図書館などを訪ね、井上英明氏 Dunn 教授・O'Neill 教授(チェアマン)、以上(SOAS)・Dr. Mills, Mrs. Whitford (UCLC) などのお世話になったが、古川・松田両教授の報告と重なる点が多いので大方は省略する。松田教授も書かれた UCLC の Aston Collection (約八〇〇点、中に Sataw 旧蔵本約三〇〇と Siebold のもの若干を含む)は、近年反町氏が調査中の由であった。

大英博物館は、最近組織が変わって The British Library を分立した(岩波新書参照)が、その東洋写刊本部長で副館長の Dr. Gardner との歓談も忘れがたい。気がついてみると互に自国語で、また時には相手国語でしゃべっているという、珍妙な会話であった。閲覧室へ通じる廊下の両側にみごとな製本の古書が並んでいたが、「この廊下を境に、こちらと一方を指して」が東洋、こちらが西洋となっている」との博士の説明に「Oh, that's just "East is East

and West is West"とやったのは、われながら上出来であった。しかも博士は、さすがに私の引いたキプリングの詩句の続きを踏まえて、「けれども」では幸にして"and never the twain shall meet"ではありません"とやり返して下さった。

多忙な博士に代って、途中からはChibbett氏が応対して下さったが、同館が日本古版本(春日版・高野版・慶長勅版等)の宝庫でもあることを改めて知ると共に、目下右両氏の手で編集中の「元禄以前日本刊本目録」(筆者の仮訳)の刊行を待望したことがあった。なお同館の和本日録は、昨夏杉谷寿郎氏が調査された由。

パリでは「国立東洋語学校(Institut Nationale des Langues et Civilizations Orientales, 通称 Langues O'、パリ第三大学付属)図書館・パリ第七大学東洋学部(Département des Langues et Civilizations de l'Asie Orientale)・国立高等教育研究所(Ecole Pratique des Hautes Etudes)・日本学研究所(Institut des Hautes Etudes Japonaises, Collège de France付属)・国立図書館など(以上、古川教授の報告をも参照)を訪ね、Heraïl, Pigeot, Frank, Rotermund各教授や小杉恵

子女史などのお世話になったが、特に有益だったのは、フランク教授ら案内で郊外のNogent sur MarneにMusée Lesoué-Smithを訪ねたことであった。ここは最近国立図書館の分館となったが、一九世紀末のコレクションで東洋書も多く、特に絵入本(奈良絵本「住吉の本地」)蓬萊山(その他)や版画の類に富むが、一八九七年刊の目録があるにも拘らず最近まで知られなかったものである。

ドイツでは、ハンブルク・ホッフム・ボン・ミュンヘン等の大学を訪ね、日本でもよく知られているBeni, Lewin, Muller, Hammitzsch, Zachert等の教授に会い、図書館又は図書室も見せて頂いたが、文学・歴史を中心に日本文学の根はかなり深く、また日本文学の欧米語訳が各地にかなりよく集められていた。資料としては、ボン大学のツァヘルト教授(多年在日し、佐佐木信綱の指導を受けた由)の室に、Trauz文庫(教授の恩師・故ベルリン大学教授トラウト博士の旧蔵書)約三〇〇点があり、名所図書類や俳書の刊本に富む。

この他ドイツで有益だったのは、ベルリンとミュンヘンに各州立図書館を訪ねたことと、シュトゥットガルト近郊のMarbach(シラーの生地)

にドイツ文学資料館(Deutsche Literaturarchiv)を訪ねたことであった。ベルリンの州立プロイセン文化財図書館(増改築中)では「願光寺縁起」(室町写、一軸)、「落窪物語絵巻」(三軸)以下未整理の写本があり、また同館が西ドイツの日本関係図書を受入の中心をなしていて、国内各大学の日本文学科の申込みに応じて郵送貸出しをしている状況を、具体的に知ることができた。またミュンヘンのバイエルン州立図書館は日本関係図書の利用者が多い由で、基本参考図書が豊富であった。一方ドイツ文学資料館は、ドイツ文学の資料(原稿・初出誌・初版本・書簡・劇場プログラム・劇評等々)を精力的に収集・整理して公開しており、その方式は大いに当館の参考になった。



ブラハの民族学博物館にて。向かって左から、筆者、ポハーチコワさん、ウィンケルヘーフエロワさん。

既に字数を超過したので、以下は極めて端折らざるを得ないが、ウィーンでは大学日文学科でSlavik名譽教授以下、助手諸氏に会い(主任のKreiner教授は来日中)、「オーストリアにおける日本文学の歴史」(仮訳)が目下編集中で近刊との朗報を得た。

東欧に入って最初のプラハは、古都の名にふさわしく美しい町であった。Winkelhoferovaさん(外国語学校)のお骨折で民族学博物館のBoharkova(ポハーチコワ)さんの室を借りてNovak教授(プラハ大学)やKrotsky氏(外国語学校)らと歓談したり、外国語学校で右両専任の立会い(時々通訳)で校長・東洋学部長両氏と会見して日本語教育の実情を伺ったり、古城の一角でアカデミー東洋研究所のKabelacova(カベラーチョワ)さん(能専攻)と会ったりして、資料的には恵まれていない中で熱心に教育・研究しておられる姿に接し、大いに感動した。特に、東欧諸国では通商事情から日本の出版物を注文・購入することができず、せめて広告や案内がほしいこと、手許の本の大部分はこの人々が来日した折に買って帰ったものと現地邦人よりの寄贈(従って非学術的なものも多い)とであることなどを聞かされ、経済関係

の回復を切望する一方、それまでも何らかの方式(例えば国際協力基金)で援助がなされることを望みたい。

(応急的には有志が手許の重複不要本などを贈るのもよいであろう。)レニングラード大学の Pius 教授(学科長)に聞く限りソ連には最近協力基金の手が伸びているようであるが、プラーハやワルシャワの現状は右の如くであった。なおワルシャワは旅程の都合で一日足らずの滞在に過ぎなかったが、Melanowicz 助教(主任 Kutaszki 教授は来日中)の講義やゼミナール(丁度世阿弥能楽論がテーマ)に出席して熱心な学生諸君と交歓できたのは幸福であった。

最後にソ連では、雪深いレニングラードで、先ずアカデミー東洋研究所にかねて文通して来た Dr. Goreg Lyub (徒然草その他の翻訳者)を訪ねたが、「同研究所日本写本解説目録」(五冊)を頂けたのはありがたかった。今回は実物を手にできなかったが、目録で下調査の上、必要なものがあれば実見したいものである。ピヌス教授に会ったことは前述した。モスクワでは、村松友次氏に御紹介頂いていた東洋研究所の Dr. G. Koriaba (ターニヤさん)に電話したところ、大学の Grinin 教授と共に会

食して下さり、日本研究の現状を詳

しく伺うことができた。残念だったのは戦前佐佐木信綱に師事して先年「万葉集」を完訳した Dr. Gunkina 女史が高齢で風邪のため(私の着いた翌日は零下二十七度)出て来られなかったことであるが、翌日電話でもかくも声を交し、互いの健康を祈って別れた。

こうして、われながらよくかけ回ったと思う。六十日間世界一周の旅を終え、モスクワから羽田に戻って早一ヶ月以上になるが、各地で受けた歓待や接した真摯な研究者の姿、更に下手ながらも努めて現地語(但しチェコとポーランドは独・英、時に露で代用)を使って接した市民や各地からの旅行者の親しみ深い態度、余暇に通ったオペラやバレエのすばらしかったシーンなど、楽しい思い出は今も臉を離れない。私としてはお世話になった多くの方々(中には残念ながら紙幅の都合でお名前を挙げ得なかった方もある)にあつく御礼申し上げると共に、取敢えずこの報告が欧米における日本研究の現状を理解する一助となり、また今後赴かれる人に何らかの参考になればと願う次第である。

開館を控えて

本田 康雄

日本学術会議の勧告、また二十有余の国語・国文学関係学会を結集した国語・国文学研究資料センター設立推進連絡協議会の要望に応じて当館が発足してから本年度五年目となった。建築その他の条件の整備をま

約一三、〇〇〇点が収集されている。一方、国文学関係の学会誌、紀要等のバックナンバー(一、〇〇〇種)、文庫・図書館の蔵書目録多数が関係者の御好意によつて寄贈された。以上を含めて当館が閲覧に提供する全資料の種類を列挙すれば次の如くである。

五、六月には開館し、人文系で最初に設置された共同利用機関としての活動を開始すべく目下、館を挙げて開館準備に没頭している。直接に整理、閲覧業務を担当する研究情報部整理閲覧室として、この際予定されている当館のサービス業務及びこれに伴う諸問題にふれ利用者各位のより一層の御協力、御助言をお願いしたいと思う。

昭和四十七年の発足以来、館の主力は設置の目的に従つて古典(写本、版本)のマイクロフィルムによる収集に注がれた。収集計画委員、調査員に多くの国文学者が参加されて全国的に調査を行い、原資料所蔵者の御協力を得て現在、作品点数にして

1. 写本、版本
2. 写本、版本のポジフィルム、紙焼写真
3. 複製本、影印本、翻刻
4. 研究書(索引、解題、注釈書、書誌、等)
5. 学術雑誌
6. 蔵書目録

これらの閲覧、複写サービス、また参考調査業務が当館の活動の基盤となる筈である。

今日まで、館の教官、事務官は創設計画に従つて業務を遂行しながら、一方では共同利用機関という新しい機関の実質を身を以て形成すべく討議し企画し体験を重ねて来た。館を

より一層理解して戴くために多少楽屋裏の話をするれば、全国にわたって文献資料の調査、収集に当った教官は創設の意気に燃え、調査員各位の御協力を受けながらも、時として膨大な資料に文献ジブシーの旅の悲哀を感じたであろう。コムピューター

導入を前提として資料・情報の整理、編集、検索システムの研究に当る教官、事務官は果しなき議論と業務の末にかつての隙な大学の研究生活を懐かしく想い返した事もあろう。先例のない事業の困難な事務処理に無い知恵をしぼった事務官の中には歴史ある機関の確固として定まった役人生活を羨しく思った人もあるに違いない。平均して言えば、事務官でもなく司書でもなくさりとて教官で

もない様な、またそのいずれでもある様な私共の鶴的境涯の中で資料館のイメージが現われては消えまた新しく現われて混沌はなお継続している。すべては新しい機関の創設に伴う当然の迷いと頑張りであったのであろうか。

開館まで約一年。学界多年の念願に於て見事に閲覧体制に導入らねばならない。国文学研究における文献学の伝統が資料館の諸活動にどの様に生かされるか、研究図書館としてのサービスの質は、館内教官の業務は、研究は、等々なお検討すべき問題が山積されたま、館はいま開館に向って直行している。利用者各位の温かい御支援をお願いしたいと思う。

文献資料部事業報告

大久保 正

国文学研究資料館組織運営規則（昭和四十七年五月一日文部省令第二十五号）には、その第四条に、「文献資料部においては、国文学に関する文献その他の資料の調査研究及び収集を行なう」と当部の任務が規定

されている。この規定にもとづき、当部では発足以来、文献資料収集計画委員・文献資料調査員の多大の協力を得て鋭意任務の遂行に当たって来たが、昭和五十二年度の開館に備え、これまでの成果を検討して、いっそ

うの充実を期したいと考えている。

以下、前号を受けて昭和五十年七月一日以降、十二月末日に至るまでの間に、当部で行なった事業について報告する。

地域別会議の開催

一、九州地区調査員会議の開催

七月十四日、佐賀県鹿島市祐徳稲荷神社社務所において開催、当館側から本年度九州地区文献資料調査収集計画について説明があり、質疑応答が行なわれた。調査員諸氏から種々希望意見の開陳があり、他地区の要望と合わせて検討することとなった。当部からは福田が出席した。なおこの会議に引き続いて、後記のように祐徳稲荷神社中川文庫本の調査をも共同で行なった。

二、中国・四国地区調査員会議の開催

七月十五日、松江市殿松むらくも会館会議室において開催、当館側から本年度九州地区文献資料調査収集計画について説明の後、各調査員から調査状況の報告があり、活潑な意見の交換が行なわれた。当部からは、大久保・伊井の両名が出席した。

三、中部地区調査員会議の開催

七月二十一日、金沢市大手町会館加賀会議室において開催、議長に原

田調査員を選出の後議事に入り、当館側から本年度中部地区文献資料調査収集について報告がなされ、次いで各調査員から、調査の現況と今後の計画について報告があった。その後、各調査員から当館の事業に対して活潑な意見や要望の開陳があり、その問題点を受けて当館側で検討を続けることとなった。当部からは村上が出席した。

四、北海道・東北地区調査員会議の開催

八月六日、札幌市北九条北海道大文学部会館において開催、当館から本年度の北海道・東北地区文献資料調査収集計画についての説明及び要望があり、質疑応答がなされた。次いで各調査員から調査の現況及び今後の計画について報告があり、最後に当館に対する種々の要望が開陳された。当部からは大久保が出席した。

総合調査の実施

一、祐徳稲荷神社総合調査

七月十五日より十九日まで、九州地区を中心とする調査員・特別調査員二十四名が参加して、祐徳稲荷神社中川文庫本の総合調査を実施し、その成果に基づいて同文庫所蔵文献資料の収集を継続して行なうことと

の幹事担当室として主に閲覧室の使用計画、とくに現に閲覧を行っている史料館との業務上の関係について原案を提出して打ち合せを重ねている。館内の国文両部の「国文連絡会議」へ、マイクロフィルム冊子目録、原資料所蔵者との契約、閲覧規程、複写サービスに関する原案等を出して、意見をまとめている。また文献資料部・研究情報部の教官で当館の分類表について継続的研究討議を行っているが、その事務は当室が担当している。なお十月一日付で永田治樹事務官(整理主任)が着任し、十二月三十一日付で竹内ひとみ事務官(司書)が退職した。

三、編集室

昭和四十八年版の「国文学研究文献目録」を今年度中に刊行するため、その編集作業を行っており、併せて四十九年、五十年の文献目録の編集作業の一部を行っている。なお文献目録の編集に当っては、文献目録委員会の協力を得、第三回文献目録委員会(一月九日)では文献目録編集のためのコンピュータ利用について論議された。

なお「国文学研究資料館紀要」第二号は三月に刊行の予定である。

四、参考室

五十年七月から情報処理室・整理閲覧室とともにマイクロフィルムの機械処理に向けての整理を行っている。情報処理室はデータベースの作成のため、整理閲覧室は整理閲覧資料の作成のため、参考室は参考用資料の作成のため、作業を分担している。十二月までに紙焼を中心に、二千二点を整理した。内訳は、東京教育大学(四六・四七年度収集分)、射和文庫・東洋文庫(四七年度収集分)、本居記念館(四七・四八年度収集分)、名古屋大学国文学研究室、小林文庫、皇学館文庫、酒田市立光丘図書館、東京大学国文学研究室、彰考館文庫、京都大学類原文庫(四八年度収集分)等である。

公開講演会は十一月八日(土)午後一時半より主婦の友ビル三階ホールで開催し、演題および講師は左の通りであった。

古典本文と定家

宮内庁書陵部 橋本不美男氏
図書調査官

読みと言葉

国文学研究資料館教授 松田 修氏

国文学の資料的研究の意義

東京大学 名譽教授 久松潜一氏

五、情報処理室

電子計算機の導入については情報検索委員会(委員長水谷静夫氏)の助言をいただいて五十一年度の概算要求を進めていたが、西館建築の遅れ等のため、来年度導入は見送らなければならぬ状況となった。しかし電子計算機導入を考慮しての準備方針は進めることになり、当館の収集する文献資料マイクロフィルムに関する書誌事項等に関するデータベース(多目的に使用できる関連づけられたデータの集り)作成を行うための経費を要求している。

計算機導入の延期にもなっており、当初は早期に結論を得る予定であった漢字字種の選定を延期することとし、今年度蓄積されつつある文献資料マイクロフィルム書誌事項等の帳票に使用されている漢字、および別記科学研究費による研究論文の抄録作成に使用された漢字のデータ等、当館の情報検索システムで実際に使用するサンプルの漢字データを考慮して慎重に決定することにした。

また本年度のシステム開発としては、検索のための主要語自動抽出を試みた。この方法は(1)句読点、(2)「」(3)字種の変る所、(4)あらかじめ用意したキーワードテーブルの語

の所で、語を分割し、分割された語のうち、(ア)漢字だけ、(イ)カタカナだけ、(ウ)又は(4)で構成されている語、を抽出する(ひらがなだけのものなどは抽出しない)ものである。(この方法を用いてキーワード選定のための主要語の抽出を科学研究費により実施中である。)このほか情報処理室では、昨年の文献資料検索システム的设计にもとづいて、東京大学大型電算機センターを利用して文献資料の帳票をカナでパンチしたものを読みこませるテストプログラムを開発中であり、まづカナで種々の仕事を実行する実験プログラムをつくるための作業を進めている。

研究論文検索システムの設計も、キーワード選定と並行して進めており、現在当館で発行している「国文学研究文献目録」作成の機械化も同時にできることを目指している。

*マイクロ写真処理

館内に設けられたマイクロ写真委員会において、従来の経験を参考に、当館の国文学関係マイクロフィルム撮影要項が作成された。一般のマイクロ写真撮影仕様が能率化を主眼としているのに対して、この撮影要領は、国の文化遺産としての文

献資料を恒久的に保存し、原本所蔵者の了解を得た上で広く国文学研究者の利用に供するという目的のもとに、特に(1)撮影に当つての原資料の保全、(2)原資料との対応関係の明確化、(3)フィルムとの長期保存、(4)学術的利用に耐える信頼性の向上等に留意して、撮影に当つての条件・準備・基準等について考慮している。

同委員会はまた文献資料部における撮影・収集から、研究情報部における作業用第二ネガおよび閲覧用ポジまたは紙焼写真本の作製、さらにフィルムの保管にいたるフローシステムを定め、保管については、今後設けられるネガ保管庫の温度・湿度条件を検討し、建築委員会と連絡をとつた。

これらの基礎の上に、マイクロ室運営委員会では、第二ネガの作製、紙焼本の作製についても具体的な方法、製品の標準化を進め、マイクロ室は、これに沿つて、四十九年までに収集されているネガ一九九四リー(九二二六点)のうち、まだ第二ネガを作製していないもの約一三〇〇リーについて、ダイレクト・テュブリケート方式(ネガから直接ネガを得る方法)により、外注して作製する一方、館内でも閲覧用ポジの作製を進めている。これらにより昭和

五十年中では、四十九年度までに収集したマイクロフィルムの処理はほぼ終わる見込みである。

＊「国文学情報検索システム開発の基礎的研究」

右のテーマで当部では昭和五十年度科学研究費補助金(試験研究(2)、国文学一八〇〇八号、三、〇〇〇千円)の交付を受けたので、研究情報検索システム開発の一環としてキーワードリストの作成に関する研究を行っている。今回の方法は、論文の抄録を作成し、その抄録中の研究用語調査を行い、その中からキーワードを抽出し、整理しようとするものである。対象分野は、物語・日記・随筆文学等、主として散文関係の研究論文に限定している。先にシステム開発費によつて開発作成した語分割・K W I C 作成・頻度集計のプログラム等を利用し、データの入力、コンピュータ処理に関する部分を外部に委託して行つてゐる。現在第一次結果(頻度集計語分割データ)が出力されたので、今後キーワードの認定、用語のグルーピングなど具体的な検討を行う。なお、約八〇〇件の論文抄録の作成については、館外の研究者や大学院生の協力を得たが、部内では情報処理室を中心とする、各室のチー

ムワークで研究にとり組んでいる。

国文学研究資料館評議員会議の開催

▼昭和五十年十月九日(木)国立教育会館において、国文学研究資料館評議員会議(総会)が開催された。議題は、左記のとおりで、久松潜一議長はじめ十一名の評議員が出席され、資料の調査、収集に関することをはじめ当館の事業について有益な助言をいただいた。

議 題

- 一、管理運営の概況について
 - 二、本年度の事業について
 - 三、明年度の概算要求等について
- ▼昭和五十一年二月十日(火)如水会館において、国文学研究資料館評議員会議(国文学部会)が開催された。議題は、下記のとおりで、佐々木八郎郎会長代理はじめ八名の評議員が出席され、資料の調査、収集に関することをはじめ当館の事業について有益な助言をいただいた。

議 題

- 一、管理運営の概況について
 - 二、事業報告
- 文献資料部の事業について

研究情報部の事業について

- 三、昭和五十一年度の予算内示について
- 四、施設の整備について
- 五、その他

計 報

当館評議員会議議長、久松潜一先生には、三月二日午後〇時三分、八十一歳の御高齢をもってご逝去になりましたので、ここに謹んで哀悼の意を表します。

人 事 異 動

- (昭和五十年十月)
- 同五十一年三月
- (採 用)
- 昭和五十年十月一日付 文部教官(史料館助手) 大藤 修
- 昭和五十年十一月一日付 文部教官(助手) 内藤 衛亮
- (転 入)
- 昭和五十年十月一日付 文部教官(助手) 石塚 英弘
- (東京大学より)
- (転 出)
- 昭和五十年十月一日付 文部教官(史料館助教授) 中村俊亀智
- (国立民族学博物館へ出向)

受贈図書

(昭和五十年七月、昭和五十年十二月)

(図書館・文庫目録等)

愛知県立芸術大学附属図書館蔵書目録第7輯美術追録篇(2) 海野文庫図書目録(島根大学附属図書館)

九州芸術工科大学増加図書目録昭和49年4月—50年3月

国立国会図書館所蔵貴重書解題第七卷——古写本の部第一——

島根大学附属図書館系原文庫図書目録千葉大学購読雑誌所在目録・雑誌総合目録補遺版一九七五

東京学芸大学増加図書目録No.2

東京都中央区立京橋図書館蔵松屋文庫分類目録・尾島文庫分類目録

東北大学所蔵和漢書古典分類目録漢籍 子部・集部・叢書部・附録

日本近代文学館受入雑誌目録昭和47年度 昭和48年度

福井大学増加図書目録昭和49年度 昭和五十年度

福井大学附属図書館現有参考図書目録昭和50年3月現在

福井県立図書館蔵書目録文学篇2 歴史篇

福原家文書目録(宇部市立図書館) 三次市立図書館昭和49年度受入郷土資料リスト

Japanese literature in European languages: a bibliography: supplement 1961, 1964/ Japan Pen Club

(図書)

青木穰子遺歌集(名古屋市教育局委員 会編) 有賀以敬齋長伯阿波日記(後藤捷一 編)

石濱神社社誌——1250年祭祀記念——(石浜神社社誌編纂委員会編)

茨城の文学史(茨城県教育委員会等 編)

宇津保物語 本文と索引 索引編 影印校注古典叢書 十六夜日記(一 瀬幸子 等編)

江戸めぐり加留多資料集(日本かるた館編)

大坂本屋仲間記録第一卷(大阪府立中之島図書館編)

音頭口説集(倉田隆延編)

学芸百科事典14(赤塚忠 等編) 笠間索引叢刊1 4 18(宮島達夫 等著)

笠間選書 18 38 41 44 46 49 51 笠間叢書 52 56

笠間注釈叢刊1(清水彰著)

春日社伝神楽調査報告(春日顕彰会 編)

春日大社重要文化財鼈太鼓(左方 調査報告 実測図(春日顕彰会編) 春日大社舞楽装束類調査報告(春日 顕彰会編)

語り物文芸の発生(角川源義著) 閑居友(沼波政保編) 九十九里町誌

芸能の科学6 東大寺修二会の構成 と所作(辻)技書(東京国立文化財研究所芸能部編) 「毛吹草」ことわざ索引(堀章男 加藤美代子 共著)

現代日本の児童文学(神宮輝夫著) 鴻山文庫本の研究——謡本の部——(表章著)

国立国会図書館件名標目表 第2版 (国立国会図書館整理部編) 国立国会図書館分類表(国立国会図書館整理部編)

書館整理部編) 吳文炳氏蔵本自行三時礼功德義總索引(三保忠夫編)

金春古伝書集成(表章 伊藤正義 共著)

西鶴の文芸(白倉一由著) 詩序集下(宮内庁書陵部編)

地滑り 山崎愛子句集(山崎愛子著) 菅原道真の文学と元積・白楽天の文学——大宰府における叙意——百韻 詩をめぐって——(川口久雄著)

川柳江戸行商(渡辺信一郎編) 創立五十周年記念論文集(九州大学 文学部編)

創立八十五周年関西学院大学文学部 記念論文集(實方清編)

大東急記念文庫蔵光明真言土沙勸信 記総索引 本文篇(三保忠夫編)

橘守部と日本文学——新資料とその 美論——(徳田進著)

中央大学九十周年記念論文集文学部 土御門上皇と阿波(藤井喬著)

東海学園国文叢書六 蒙古襲来絵詞 詞書本文並びに総索引(田島毓堂 著)

日本塩業大系 史料編(日本塩業大系 承編集委員会編) 日本古典文学全集 1 5 7 16 18 23 26 43 45 48 50 51 卷(萩原浅男 等校注・訳) 祝詞(青木紀元編)

俳文学資料 第一—二輯(大坪利絹 他校)

芳舎漫筆(青木穰子著) 宝曆期吉原遊女評判記細見(八木敏 一編) 萬葉集の国語学的研究(津之地直一 著)

三田村鳶魚全集 2 6 8 10 11 13 14 16 卷

宮崎県史料 第一卷(宮崎県立図書館 編)

吉永登先生古稀記念上代文学論集 (関西大学国文学会編) ヨーロッパの日本学(寺川喜四男著)

良寛論考(谷川敏郎著) 和歌山県史 中世史料1(和歌山県 史編さん委員会編)

Fujiwara Teika's superior poems of our time

Handbook of Japanese Grammar / Harold G. Henderson

A hundred things Japanese / Japan Culture Institute

Japan: a short cultural history / G. B. Sansom

Lalcardo Hearn / Nina H. Kennard

The no plays of Japan / Arthur Waley

The tale of Genji: a novel in four parts / tr. by Arthur Waley

大学内学会および研究会一覽

昭和五十年、研究情報部情報室では、全国の国・公・私立大学ならびに短期大学に對して、学内の国文学関係学会および研究会活動の調査をお願いした。調査要項は、(1)会の名称(2)設立年月日(3)事務局住所・電話番号(4)代表者(5)事務連絡係(6)会員数(7)会費(8)入会金(9)入会資格(10)機関誌名(発行状況)(11)例・大会日程(12)例・大会会場などである。御多忙にもかかわらず、各大学研究室から、早速、詳細な御回答をいただいたので、情報室ではこれを集計し、その一部を後記の要領により一覽表として掲載することにした。ただ、若干の大学からは未だ御返答いただいていないので、上記要項に基き、御回答いただくよう切に願う。

掲載の要領は、以下のとおりである。掲出順は、文部省大学局大学課監修昭和五十年「全国大学一覽」によつた。そして、まず各学会・研究会の母体ともいへべき大学名・学部名をゴチック体で掲げた。つぎに①として学会名を記したが、紙幅の都合上、たとえば「北海道大学国文学会」の正式名称を、「国文学会」

のように、大学名を省略して掲げた。学会によつては学部名を冠する場合もあるが、これも省略した。つぎに②として研究会名を掲げた。研究会は原則として大学院生以上で組織され、機関誌を発行しているものとしたが、今回は必ずしもこの限りではない。なお、学会名・研究会名の下に()を施して記したのは、その機関誌である。これは正式名称で掲げた。今回は紙面の制約で国立大学を掲載するに止まったが、次号には公・私立大学の部を掲げる予定である。

国立

- 東北大学文学部①日本文芸研究会 (文芸研究) ②国語学研究会・文芸談話会 (日本文芸論稿)
- 宮城教育大学教育学部①国語国文学会 (宮城教育大学国語国文)
- 秋田大学教育学部①国語国文学会 (秋田国語国文 (休刊中))
- 山形大学文学部①山形県方言研究会 (山形方言)
- 同 教育学部②国語研究会 (国語研究 (休刊中))
- 福島大学教育学部①国語国文学会 (言文)
- 茨城大学文学部 (現在ナシ)
- 同 教育学部 (ナシ)
- 筑波大学文学部類文芸言語学系②日本文学研究会
- 宇都宮大学教育学部①国語国文学会
- 群馬大学教育学部①語文学会 (語学と文学)
- 埼玉大学教育学部 (ナシ)
- 同 教育学部 (ナシ)
- 千葉大学文学部①国語国文学会 (語文論叢)
- 同 教育学部②国語科教育の会
- 東京大学文学部①国語国文学会 (国語と国文学 (至文堂刊))
- 東京学芸大学教育学部①国語国文学会 (学芸国語国文学) ②名称未定 (大学院国語教育専攻生の会・機関誌「烽火」)
- 東京教育大学文学部①国語国文学会 (言語と文芸 (桜楓社刊)) ②国語学談話会・説話談話会 (説話)・近代文学研究会 (近代文学論)
- お茶の水女子大学教育学部①国語国文学会 (お茶の水女子大学国文)
- 横浜国立大学教育学部①国語科卒業生の会 (会報)
- 新潟大学文学部①国文学会 (新潟大学国文学会誌) ②新潟県ことばの会 (ことばとくらし)
- 同 教育学部①国語国文学会 (新大國語)・国語教育学会 (新潟国語教育研究) ②方言研究会 (方言の研究)
- 富山大学文学部 (ナシ)
- 同 教育学部①国語教育学会 (刊行計画中)
- 金沢大学法文学部①国語国文学会 (金沢大学国語国文)
- 同 教育学部①教育学部国語国文学会 (金沢大学語学・文学研究) ②金沢古典文学研究会 (説話・物語論集)・近世語研究会
- 福井大学教育学部①国語国文学会 (国語国文学)
- 山梨大学教育学部 (ナシ)
- 信州大学文学部②方言研究会
- 同 教育学部 (ナシ)

- (参考) 長野県国語国文学会(国語国文学会報) 県内の大学・短大・高専・高校に勤務する国語国文学文教官による学会。事務局県立屋代高校内。
- 岐阜大学教育学部①国語国文学会 (岐阜大学国語国文学)
- 静岡大学人文学部①国文談話会(会報)・国語漢文学会(人文・教育・教養三部部の関連教官による組織)
- ②文学談話会(英・仏文等文学関係教官による組織)・静岡県方言研究会
- 同 教育学部②国語教育の会
- 名古屋大学文学部①国語国文学会 (名古屋大学国語国文学) ②名古屋平安文学研究会・名古屋中世文学研究会・軍記物語研究会(会報)
- 愛知教育大学教育学部①ナシ(国語国文学報)
- 三重大学教育学部①国語国文学会 (国語国文研究) ②(三重県方言)
- 滋賀大学教育学部①国文会(滋賀大 国文)
- 京都大学文学部①国文学会(国語国文(中央図書))
- 京都教育大学教育学部①国文学会(国文学会誌)
- 大阪大学文学部①国語国文学会(語文)
- 大阪教育大学教育学部①国語教育学会(国語と教育) ②(学大国文)
- 神戸大学文学部①「研究ノート」の会(国文学研究ノート)
- 同 教育学部①国語国文学会
- 奈良教育大学教育学部②国語国文学研究会
- (参考) 奈良県国語教育研究協議会(本大学卒業生を中心とした奈良県全域のもの)
- 奈良女子大学文学部(ナシ)
- 和歌山大学教育学部(ナシ)
- 鳥取大学教育学部(ナシ)
- 鳥根大学文学部①国文学会(国文学紀要) 本会は文理・教育両部の合同組織
- 同 教育学部①島大国文の会(島大国文)
- 岡山大学法文学部①言語国語国文学会(岡大 国文論稿)
- 同 教育学部(ナシ)
- 広島大学文学部①国語国文学会(国文学攷) ②広島平安文学研究会(古代中世国文学)・広島中世文芸研究会(中世文芸)・広島近世文芸研究会(近世文芸稿)・近代文学研究会(近代文学試論)・方言研究会(広島大学方言研究会会報)
- 同 教育学部①国語教育学会(国語教育研究) ②国語教育研究会(会報)
- 山口大学文学部教育学部①山口大学・山口女子大学国語国文学会(会報) 向大関係者によって組織
- 徳島大学教育学部②国語科研究談話会
- 香川大学教育学部①国文学会(香川大学国文研究)
- 愛媛大学法文学部①愛媛国語国文学会(愛媛国文研究)・愛文会(愛文・その他別冊索引を刊行) ②子規研究会(正岡子規資料と研究)・古典叢刊行会(愛媛大学古典叢刊)
- 同 教育学部①国語国文学会(愛媛国文と教育) ②国語国文学研究会(国文学研究会報)・源氏物語読書会(源氏こぼれ草)
- 高知大学文学部①国語国文学会(高知大 国文)
- 同 教育学部①国語教育学会(高知大 国語教育)
- 福岡教育大学教育学部①国語国文学会(国語国文学会誌)
- 九州大学文学部①国語国文学会(語文研究)
- (参考) ①西日本国語国文学会(西日本国語国文学会報) 西日本地区(九州・沖縄・山口)における国語学・国文学・国語教育関係者で組織
- ②日本近代文学会九州支部(近代文学論集) 九州・山口に在住する近代文学研究者による組織
- 佐賀大学教育学部①国語国文学会(佐賀大 国文)
- 長崎大学教育学部①国語国文学会
- 熊本大学法文学部①国語国文学会(国語国文学研究)
- 同 教育学部①国文学会(国語研究と教育)
- 大分大学教育学部①国語国文学会(国語の研究)
- 宮崎大学教育学部(ナシ)
- 鹿児島大学法文学部①国語国文学会(薩摩路)
- 同 教育学部(ナシ)
- 琉球大学法文学部②おもしろ研究会
- 同 教育学部(ナシ)

◇ 編集後記 ◇

▼昨年十一月八日、当館主催の講演会に、「古典本文と定家」と題してご講演くださった橋本不美男先生から冒頭原稿をいただきました。

▼新収資料紹介は前号に引きつづき掲載する予定でしたが、紙面のついでに割愛せざるを得なくなりました。ご了承ください。

昭和五十一年度春季学会開催一覽

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会は、以下のとおりである。

この一覽表は春秋二回掲載するので、事務局の変更、学会開催の日程・会場など決定後は、研究情報部情報室宛お知らせいただきたい。学会掲出はアイウエオ順、以下、①事務局（東京都）は省略、②大会開催日③会場の順

解釈学会①豊島区西巢鴨一―二四―一四教育出版センター内②八月中旬③東京
近代語学会①世田谷区太子堂一―七七昭和女子大学文政学部国語研究室内②七月三日③昭和女子大学
国語学会①千代田区神田錦町三―二武蔵野書院内②五月一五―一六日③上智大学

古事記学会①千葉県市川市国府台一―八―三〇東京医科大学歯科大学歴史学研究室内②六月二六―二七日③日本女子大学
古代文学会①世田谷区北烏山四―四―一三針原孝之方②例会のみで大会なし。夏季セミナー七月末③箱根明治大学仙石寮
上代文学会①世田谷区桜上水三―一二

五―四〇日本大学国文学科研究室内②五月二九―三一日③山形大学
説話文学会①新宿区戸山町四―一早稲田大学文学部国東研究室内②六月二〇日③早稲田大学
全国大学国語国文学会①千代田区神田駿河台一―一明治大学日本文学八―二研究室内②六月五―六日③明治大学駿河台校舎
中古文学会①神奈川県川崎市多摩区生田四七六四専修大学国文学科研究室内②五月二二―二三日③専修大学神田校舎
中世文学会①世田谷区桜上水三―一二五―四〇日本大学国文学科研究室内②五月二九―三〇日③日本大学文学部
日本演劇学会①新宿区西早稲田一―六一―一早稲田大学演劇博物館内②四月二六―二七日③香川県金丸座
日本歌謡学会①渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第二研究室内②五月八―九日③上野学園大学
日本近世文学会①新宿区戸山町四―一―一早稲田大学文学部曜峻研究室内②五月二九―三〇日③大妻女子大学
日本近代文学会①千代田区三番町一

二大妻女子大学国文学科研究室内
②五月一五日③大妻女子大学
日本文学協会①豊島区南大塚二―一七―一〇日本文学協会②なし

日本文学風土学会①世田谷区太子堂一―一七昭和女子大学短期大学部高橋良雄研究室内②五月二九日③昭和女子大学 ※関西支部 大阪市東区本町四―二七相愛女子短期大学森本茂研究室内
日本文芸研究会①宮城県仙台市川内東北大学国文学研究室内②六月一―二―一三日③東北大学
俳文学会①豊島区目白一―一五―一学智院大学国文学科宮本三郎研究室内②なし

表現学会①愛知県愛知郡長久手町長湫片平九愛知淑徳大学国文学科研究室内②五月二二日③愛知淑徳大学
万葉学会①大阪府吹田市千里山東三関西大学国文学科研究室内②なし
美夫君志会①名古屋市昭和区八重本町一〇―一二中京大学国文学科研究室内②七月二五―二七日③中京大学
和歌文学会①文京区白山五―二八―二〇東洋大学国文学科研究室内②夏期講座七月二―一六日③東洋大学

国文学研究資料館紀要第二号
萬葉集における助詞「を」の用法と表記―人麻呂歌集へのアプローチ― 岩下 武彦
説経説きと初期説経節の構造 徳田 和夫
大伴大江丸の研究 加藤 定彦
祐徳稲荷社寄託「東撰和歌六帖」中川文庫本 (解説と翻刻) 福田 秀一
翻刻「捨小舟」 松田 修
(昭和五十一年三月発行)

国文学研究資料館報 第六号
昭和五十一年三月二〇日 発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―二六―二
郵便番号一四二
電話(七八三)九一〇六(代)
印刷所 秀英堂紙工印刷機

国文学研究資料館
近刊の予定